

佳作

流れ星

東京都女子学院高等学校二年 田中 智穂

流れ星を見ていたら、その勇気を称えたくなかった。一瞬だけきらっと光って消える。その一瞬をきつと誰かは見ていてくれる。でも、もし誰も気づかなかつたら？私は、流れ星みたいなことはできない。

友達と行った伊豆の空は東京よりずっと澄んでいて、きれいな星が見えた。みんなでコンクリートの道に仰向けに寝転がって、知っているだけの知識を寄せ合い、星座を探した。視界の真ん中に、電線があるのがおかしかった。でも、残念とは思わなかった。電線よりも星のほ

人間の目に見えるようになったのが、流れ星。」

でも、そうなると流れ星は別に勇気があるわけではない。生まれた時から流れ星なのだ。勇気があっても、臆病でも、さつと空を流れなくてはいけない。誰に見られても、誰にも見られなくても。一瞬を輝かせるのだ。

人間なら、どうだろうか。やっぱり、自分が良いことをする時、輝く時は誰かに見てもらいたい。証人が欲しいと思うのではないだろうか。誰も見ていないかもしれない状況で、ぱっと一瞬だけ輝いて消えることができるだろうか。

私には、一年程前から登校する度に気になっていることがある。地元の駅の近くにいるホームレスのことだ。毎朝、私は彼が縮こまって寝

うが断然勝^まっていたからだ。背中でごつごつ痛いコンクリートも気にならなかった。ただ、迫ってくるような空、ぱつぱつ咲くひそひそ声が、心をいっぱいにくれた。

その時、ぱっと流れ星が見えた。らしい。私は見逃してしまった。でも、みんなと一緒に私もうれしくなるのである。すると、誰かが言うのだ。

「流れ星は、最初から流れ星なんだよ。普通に瞬いている星が突然流れるんじゃないよ。宇宙をずっと飛んでいる塵が大気圏に入って

ている横を通って駅にむかっていた。彼は長袖のジャージを何枚も着込んでいる以外、何も持ち物は無かった。食べ物も水すらも得られるようには思えなかった。しかし、私がすぐ側のコンビニで、食べ物と水を買つのは簡単なことだ。それをホームレスにあげたって、金銭的に私には全く痛手ではない。毎朝、彼を見ながらそんなことを思った。でも、私にはできない。なんとなく、「怖い」という先入観が消えない。しやべりかけられないのだ。だったら、寝ているホームレスの横に、そつと食べ物と水を置いていくだけでいい。しかし、それもできなかった。やはり、近づいたり、関わったりするのが「怖い」という思いと気恥ずかしさがあった。それを我慢してまでわざわざやるということに、何

の得もないと思ってしまったのだ。結局、心ばかりおせっかいで、私のやったことは「無視」だった。

どうして「何の得も無い」と思ったのだろうか。そもそも、なんの「得」を求めるのだろうか。改めて考えてみると、「何の得も無い」「誰にもほめてもらえない」ではないだろうか。やはり、人から見られているかどうかを意識しているのだと思う。私には、流星のような格好良いことはできなかった。しかし、自分のことを棚上げれば、大半の人が私と同じなのではないだろうか。だから、私にできなくてもしょうがない、と納得してみるのだ。

ある朝、いつもの場所に、あのホームレスはいなかった。見ると、そこは水浸しだった。近流星と同じことをする人が。

伊豆で私が友達みんなと一緒に見たのは、二度目の流星だった。輝く姿を見逃さなかったことがなんだかうれしかった。ぼーっと見ていると、とびぎり輝いていれば目に飛び込んでくるものだ。流星は輝けば輝くほど、誰かの心に響く。気にするべきなのは、周りの目ではない。よそ見をせずに、まっすぐ前だけ見て光を放つのが流星なのだ。とにかくまっすぐ輝くことだけに一生懸命になってみよう。そんな風に思った。

今年の夏に見た流星を、私は決して忘れない。そんな私の感動を知る由も無い流星を。



くのビルの社員が、ホームレスが住みつかないように水を撒いたのだった。それを見たとき、すぐ後悔した。何もしなかった自分は結局、この社員と同じなのだ。冷たい水で彼を追い出したのは、紛れも無く私なのだ。それから、彼の寢床は百メートル程離れた銀行の裏になった。毎朝、そこを通る度に以前の倍、情けなかった。日々増えていく彼の独り言は私の罪の証だった。

しかし、ある日、何かが決定的に違った。いつも独りのホームレスの横に男の人が座っている。その人は必死に彼の顔を見ながら、ゆっくり、しっかり頷いていた。彼の話を聞いているようだった。「大半の人が私と同じ」そんな私の考えは間違っていた。とつとつ現れたのだ。